

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.39

原勝四郎と野長瀬晩花



原勝四郎 1931 (昭和6)年頃 45歳頃

1886 (明治19)年に現在の田辺市栄町に生まれた洋画家の原勝四郎と、1889 (明治22)年に現在の田辺市中辺路町近露に生まれた日本画家の野長瀬晩花 (本名は弘男)の画業を振り返る特別展で、意図せず同じ会期での開催となりました。

「原勝四郎展 南海の光を描く」は和歌山県立近代美術館と共同で企画したもので、一つの展覧会を県内二つの美術館を会場として実施します。また「野長瀬晩花と国画創作協会の画家たち」は熊野古道なかへち美術館 (田辺市立美術館分館)の開館25周年を記念する展覧会の一つで、田辺市立美術館 (本館)と熊野古道なかへち美術館の二会場で同時に開催します。

原は西洋の美術を学ぶことを志して東京に出た後、無理をして第一次世界大戦下のフランスに渡り、パリからアルジェリアまでの各地を放浪する苦難に満ちた生活を送って 1921 (大正10)年に帰国しました。その後は、亡くなるまで郷里の田辺と隣町の白浜に留まって制作を続けました。

晩花は大阪で日本画の修業を始め、京都に移って京都絵画専門学校 (現在の京都市立芸術大学)の第一期生として入学しますが、ほとんど学校には出ずに中退して独創的な表現を追求します。その後、個性の表出を重視して、新しい日本画の表現を切り開こうとしていた京都の同世代の画家たちと 1918 (大正7)年に国画創作協会を創立し、



『雲と石と人間』創刊号表紙
1927 (昭和2)年 田辺詩話会刊

斬新な作品を発表して旋風を起こしましたが、同会の活動が10年で終息した後は画壇から離れてゆき、東京で生涯を閉じました。

当地に生まれ、同じ時代を画家として生きた二人ですが、上記のように異なる道を歩み、接点はほとんどありませんでした。しかし、ともに明治末から大正にかけての時代に青春を送り、次々に伝えられてくる西洋の文化に憧れて、それを受け止めながらも、模倣ではない日本近代の美術史に刻まれるべき独自の作品を残した傑出した存在として並び立っています。当館も継続して調査と研究を重ねてきた画家であり、本館、分館ともに四半世紀の活動を経たこの時期に、期せずして二人の築いた芸術を同時に紹介できる機会を持てたことは、幸いな巡り合わせに思います。

およそ 100年前の 1927 (昭和2)年に、田辺の詩人たちが発行した同人誌『雲と石と人間』の創刊号で二人の作品が並ぶことがありました。原は同誌に自画像素描を表紙絵として提供し、晩花は「ルノアールの裸女」と「移住者」と題した二篇の詩を寄稿しています。同誌は「原勝四郎展 南海の光を描く」の田辺市立美術館会場で参考資料として展示しています (左下の図版参照)。

(学芸員 三谷 渉)

INFORMATION

特別展
原勝四郎展 南海の光を描く

会場／田辺市立美術館 展示室3・4・5

熊野古道なかへち美術館開館25周年記念特別展
野長瀬晩花と国画創作協会の画家たち

会場／熊野古道なかへち美術館
田辺市立美術館 展示室1・2

会期／2023年10月7日(土)～12月3日(日)
開館時間／午前10時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日 (ただし10月9日は開館)
10月10日(火)・11月24日(木)

観覧料／田辺市立美術館 600円(480円)
熊野古道なかへち美術館 400円(320円)
※学生及び18歳未満の方は無料
()内は20名様以上の団体割引料金

くまびでつくろう! ②

熊野古道なかへち美術館を会場にして、アーティストとともに作品をつくって公開するワークショップ「くまびで作ろう!」の2回目を今年度も3月に予定しています。今回は和歌山県湯浅町出身の陶芸家、橋本知成さんを講師にお招きします。

橋本さんは独特の金属的な質感を持った、球や立方体といったミニマルな形の作品を制作し、時にそれをモルタルで作った造形と組み合わせで発表しています。その表現は国際的に評価され、イギリスのヴィクトリア&アルバート美術館やアメリカのロサンゼルス・カウンティ

美術館等に作品が収蔵されています。また、今年の夏には和歌山県立近代美術館で、橋本さんの作品と同館のコレクションとを一緒に紹介する展覧会「なつやすみの美術館 13 feat. 橋本知成」が開催されています。

ワークショップの詳細が決まりましたら当館のHP等でお知らせしますので、お楽しみにいただければと思います。

(学芸員 知野 季里穂)

兼葭堂を中心とした交友ネットワーク

「知の巨人」として評価されている木村兼葭堂(1736～1802)は、書画をはじめ本草学、煎茶道の他、オランダ語などの外国語にも精通していました。絵画や古今の珍しい器物を、自身の経済力を背景に貪欲に収集を重ね、それを広く公開したことから、大坂の兼葭堂の周囲には当代屈指の文化サロンが形成されました。兼葭堂が収集した文物の情報を求めて多くの文人墨客がその家を訪れています。

例えば、大坂で米問屋を営み、後に同地の蔵屋敷に勤め、多くの文人墨客と交わった岡田米山人(1744～1820)は、親交のあった兼葭堂のネットワークを介してその知己を得たといわれています。また、大坂文人画壇の重鎮として名を馳せた儒学者、十時梅厓(1749～1804)は兼葭堂と親しく交流しており、その梅厓が仕え、自身も絵画をよくした伊勢長島藩主の増山雪斎(1754～1819)も兼葭堂との繋がりがあったことが、二人の書簡のやりとりからうかがうことができます。

このように広い交友関係を持った兼葭堂ですが、紀州の

木村兼葭堂(秋山訪友図)



田辺市立美術館蔵

REPORT

アーティストトーク

「妻木良三 侵食する風景」展

和歌山県湯浅町在住の美術家、妻木良三(1974～)の近年の制作を紹介する特別展「妻木良三 侵食する風景」を今年の4月から6月にかけて熊野古道なかへち美術館で開催しました。展覧会では絵画9点と、展示室の空間に合わせて制作したインスタレーションの構成によって、表現の要となっている襲の増殖がイメージされる場が生み出されました。

会期中に2回のアーティストトークを開催して、作家自身から作品や制作についての話をうかがう機会をもちました。妻木さんは、作品のモチーフとなっている布の襲や、展覧会のタイトル「侵食する風景」について、また今回のインスタレーション制作にあたってのエピソードなど、さまざまなことを会場で話してくれました。参加者からは



インスタレーションの説明をする妻木さん

それぞれの作品についての質問もあり、妻木さんはその一つ一つに丁寧に答えてくれました。参加いただいた大勢の方々とともに、たいへん充実した時間を持つことができました。(学芸員 知野 季里穂)

文人墨客との関係も深く、当地を代表する文人画家である、桑山玉洲(1746～1799)が兼葭堂との交流の中で実見した文物は、その絵画表現や様々な文人画論の着想に至る背景にもなったと考えられています。玉洲の遺著『絵事鄙言』が兼葭堂によって刊行されていることは二人の交流の深さを何よりも物語っています。その他にも和歌山城下に生まれた文人画家、野呂介石(1747～1828)や、介石に学んだといわれる愛石(1764～?)、和歌山城下の吹上寺住職で詩書画を得意とした松丘(1765～1833)も兼葭堂と密接に交流していました。

本草学の分野においても、兼葭堂が諸国の珍しい貝類を見聞して描いた図譜から、南紀を訪れた時に田辺の所蔵家が持つ貝類標本を実見したことが分かり、当地との関係をうかがい知ることができます。

2月からの展覧会では、こうした兼葭堂自身の幅広い分野での活動を紹介しつつ、『兼葭堂日記』に交流が記された紀州を主とした文人墨客の作品を展覧し、これまで個々に注目されることが多かった画人たちの画業を、兼葭堂を中心とする交友ネットワークという視点から紹介します。(主任 辰巳 充)

INFORMATION

特別展
木村兼葭堂とその交友

会場／田辺市立美術館
会期／2024年2月10日(土)～3月24日(日)
開館時間／午前10時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日 (ただし2月12日は開館)・2月13日(火)
3月21日(水)
観覧料／600円(480円) ※学生及び18歳未満の方は無料
()内は20名様以上の団体割引料金

ミュージアム・コンサート

「ユーフォニアムと現代の音楽」

今年の7月から9月にかけて田辺市立美術館で開催した小企画展「戦後美術 変容するかたち」の関連事業として、会期中に「ユーフォニアムと現代の音楽」と題したミュージアム・コンサートを開催しました。まだ歴史の浅い金管楽器、ユーフォニアムの奏者で、和歌山大学准教授の小寺香奈さんをお招きし、閉館後のエントランスホールを会場にして実施しました (小寺さんには今号の「美術館へのきもち」にもご寄稿いただいています)。

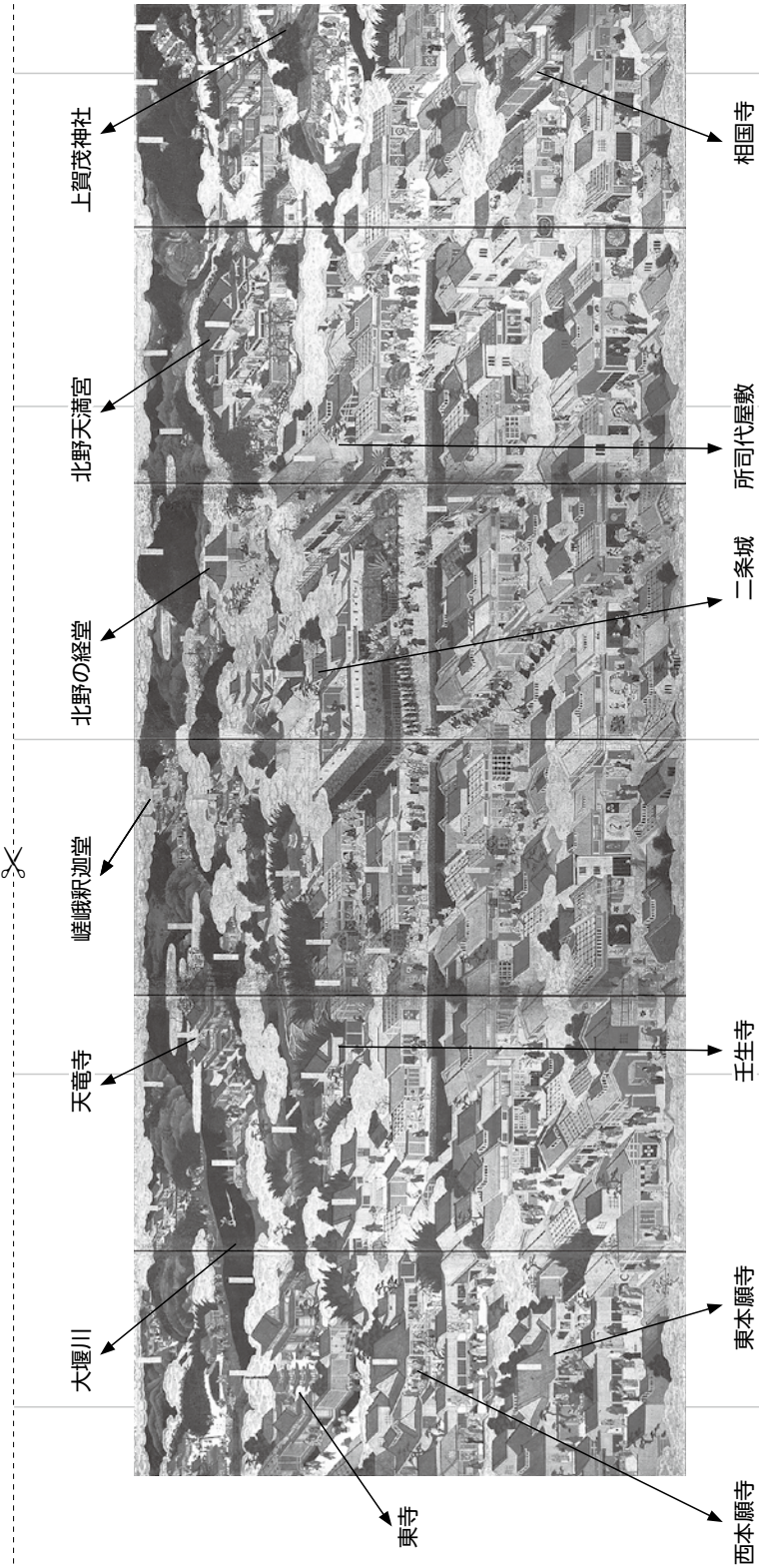
コンサートでは、あらかじめ録音された電子音と共演するジョン・ボダ作曲の「ソナチネーユーフォニアムとテープのための」(1970)や、デイヴィッド・ギリングハム作曲の「ブルー・レイク・ファンタジー」(1995) から、重音楽法が印象的な第4楽章「古代先住民のうた」など5曲が披露され、この50年ほどのあいだに生まれた新しい音楽に触れる、またとない機会となりました。

また、今回のコンサートでは、エレクトロニクス奏者で音響エンジニアの牛山泰良さんにもご協力いただいて、最新のテクノロジーを用いた今堀拓也作曲の「飛翔する雁の群れーユーフォニアムとライブ・エレクトロニクスのための」(2013)を演奏することも出来ました。今回の演奏のために改訂を施してくれた今堀さんも会場にお越しになり、演奏前にご挨拶いただきました。

新型コロナウイルスの影響で中断していたミュージアム・コンサートですが、ようやく4年振りに再開することができました。今後も定期的に、このような展覧会に関連した内容のコンサートも開催してゆけたらと思います。美術とともに音の芸術も伝えられる場に美術館がなりましたらなによりです。(学芸員 知野 季里穂)

江戸時代初期の京都

廻り廻る図面画 (大観)



田辺市立美術館蔵 (随筆家長谷川町子の日記)

ORAZUM 100 年

廻り廻る図面画 E-1-1

長谷川町子の日記に描かれた京都の風景は、江戸時代初期の京都の姿を写し、その後の京都の発展を予言しているようにも見える。